キャンパス散歩

ふだん何気なく行き交うキャンパス。
その歴史あるたたずまいに眼を向けると、
新しい発見に出会う。

散歩人

藤井恵介

東大の講堂と卒業式

ここに一枚の新発見の写真(図❶、The University of Tokyo 1877-2000　大学史史料室編)がある。大正三年に竣工した法文科大学講義室の内部が写っている。この建築は「八角講堂」と俗称されていた。関東大震災(大正一二年)で類焼した後、トタン屋根を懸けるという応急処置を受けたが、数年後に取り壊されてしまった。ほんの十数年だけの命だ。しかし、建設当時の設計図が施設部に残されていて詳細までわかる。ゴチック風の外観は明治一〇年代の法文科大学校舎の様式に倣っているが、独立性の強い八角形という形そのものが印象的だ(図❷)。だが、何といっても魅力的なのは内部の天井の作り方だ(図❸)。格子で組んだドームになっていて、屋根を支える鉄骨から吊り下げていた。

この写真を見て改めて驚いた。まるでローマのパンテオンのようじゃないか、言い過ぎだとすれば東京駅のドームか。大きな空間の質を決定するのは天井の表現だ。

そう言えば、安田講堂(大講堂)の天井も凝っている(図❹)。大きなシャンデリアが中央から下がり、同心円状の輪が幾重にもかさなり、幾何学的な模様が入って、トップライトの光を天井裏から取り込んでいる。

東大の講堂を調べていると、どうしても工部大学校(工学部の前身)の講堂(図❺)にたどりついてしまう。虎ノ門に明治一一年に竣工した校舎は、フランス人ボアンヴィルの設計になるが、中央に講堂がでんと構えていた。内部は極めて装飾豊かで、天井は華やかな格天井である。明治初期、東京にまだ本格的西洋風建築が無い時代、様々な催しに用いられたという。

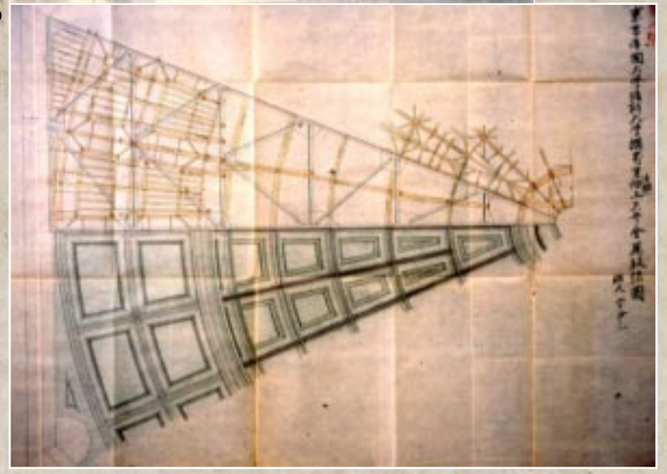
今回『東京帝国大学五十年史』を調べてみたら二重に驚いた。というのは、今まで気になっていた三つの講堂が全部卒業式に関わっていたからである。東京大学が帝国大学となった直後、明治一九年七月一〇日に挙行された第一回目の卒業式(卒業証書授与式)は「工科大学中堂」を会場とした。本郷で工科大学の校舎が竣工するのは二年後の七月だから、これは当然旧工部大学校の講堂だ。卒業生は一〇〇人内外だが、列席者は三〇〇人を越えたという。明治二二年からは新築の工科大学中庭で挙行された。遅れて帝国大学に編入された工科大学の建物が使われたのは面白い。卒業式にふさわしい、大規模な立派な施設が、他になかったということか。

式場は明治二六年から附属図書館となり、さらに大正三年に八角講堂が竣工すると、翌年からここに移る。前出『五十年史』は「中央大講堂」という言い方をしている。卒業生が一〇〇〇人を越えようとしていた時で、新たな広い場が必要となったらしい。明治三三年以来、卒業式には天皇の臨幸が慣例となっていた。そのために式場には極上のデザインが要求された。しかし、大正七年をもって大学全体での卒業式は廃止され、臨幸もなくなった。

安田講堂が大正末年に計画されたのは、天皇の再びの臨幸を願い、便殿(天皇の休息所)を備えた大講堂を造ろうとしたことが動機である。どうやら学内の見事な講堂は、卒業式と天皇の臨幸に深く関わっていたらしい。

ふじい・けいすけ(大学院工学系研究科助教授)

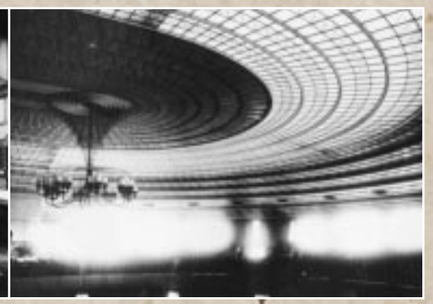
❶



❸

❷

❺



❹

図❶　八角講堂内部　写真(谷喬氏蔵)
図❷　八角講堂外部　写真(谷喬氏蔵)
図❸　八角講堂天井　写真(施設部蔵)
図❹　安田講堂内部　写真(建築学専攻蔵)
図❺　工部大学校講堂内部・写真(建築学専攻蔵)

東京大学広報誌
TANSEI
February, 2001

第4号

本号の編集、写真の使用にあたっては、多くの方々にご助力、ご協力をいただきました。
表紙の写真は、2000年4月に柏キャンパス(千葉県柏市)へ移転した物性研究所です。

編集発行　東京大学広報委員会

編集委員　大塚柳太郎
大学院医学系研究科教授

土屋尚之
大学院医学系研究科助教授

内野儀
大学院総合文化研究科助教授

黒瀬等
大学院薬学系研究科助教授

羽田正
東洋文化研究所教授

大矢禎一
大学院新領域創成科学研究科教授

中野実
東京大学史史料室助教授

印刷・製本　印象社
発行日　平成13年2月28日

お問い合わせ先
東京大学総務部総務課広報室
〒113-8654
東京都文京区本郷7丁目3番1号
電話　03-3811-3393
FAX　03-3816-3913
E-mail: kouhou@adm.u-tokyo.ac.jp
URL: http://www.u-tokyo.ac.jp/index-j.html